

「分かちあい」の起原：ヒトとヒト以外の霊長類における共存の諸相
第5回研究会報告

1. 著作権保護のための表示：

当報告の内容はそれぞれの著者の著作物です
Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時：2024年11月17日（日）13:30～18:30

場所：AA研306室

報告者：

- 1) 生駒美樹（東京外国語大学）
- 2) 川添達朗（NPO法人里地里山問題研究所/AA研）

参加者：13名（対面、オブザーバー参加者2名）

3. 内容（発表要旨および主な議論）

3-1 互酬性再考：ミャンマーのチャ摘み労働者と農家を事例に（生駒美樹）

【要旨】

本発表では、グレーバー（2016）以降の互酬性批判の議論をレビューした上で、社会的・経済的優劣のある二者間で結ばれるパトロン＝クライアント関係のなかに「分かち合い sharing」がいかにみいだされるのか検討する。具体的には、ミャンマーのチャ農家とチャ摘み労働者のあいだで結ばれる「支援（パラウン語でトツ）」と呼ばれる互酬関係の事例を取り上げる。

近年、文化人類学では、グレーバーの『負債論』（2016）を嚆矢とする負債研究から、贈与や互酬性に関わる議論の問い直しが行われている。グレーバー（2016）は、文化人類学における従来の贈与や互酬性の議論は、人間同士の関わりをある種の交換——贈与には必然的に負債が伴い、受け手には返礼の義務が生じるという想定に基づく——と想定しているという点では経済学の市場交換の議論と同じであると批判する。そして、「（基盤的）コミュニズム」、「交換」、「ヒエラルキー」という経済的関係の基盤となるモラルの三原理を提唱した。

①「（基盤的）コミュニズム」は「各人はその能力に応じて [貢献し]、各人にはその必要に応じて [与えられる]」（p.142）という原理にもとづいて機能する、あらゆる人間の社交性（社会的交通可能性）の基盤、②「交換」は「相対する双方が、それぞれ与えたぶんだけ

け受けとるといったやりとりのプロセスであり、「等価性に向かうやりとりの不断のプロセス」(p.154)、③「ヒエラルキー」は、優位者と劣位者の間である行為が反復的に行われることにより、それが慣習となって行為者の本質的性格を決定した関係であり、先例の論理(p.164)で機能する。グレーバーは、この三原理はあらゆる社会に并存し、負債を結節点にもつれ合うとし、パトロン＝クライアント関係は三原理の場当たりの混合で構成されていると指摘している。

本発表では、「分かちあい sharing」を、グレーバーの提唱するモラルの三原理の中に位置付けるため、小田による(1994、2019)交換の四角形の議論を参照した。交換の四角形(小田1994、2019)とは、ポランニー(1975)による交換の3類型(ポランニー1975)①「互酬(贈与交換)」、②「再分配」、③「交換(市場交換)」に、④「分配」(Sharing)を独立した交換様式として追加したモデルである。小田(2019)は、グレーバー(2016)の「(基盤的)コミュニズム」を、「分配」と「贈与交換」の混成態から成り立つものであると指摘する。小田(2019)によれば、互酬性の規範や反対給付の義務がなく、受け手に「負い目」が生じない「分配」は、「(基盤的)コミュニズム」の基盤をなすものであるが、「分配」だけでは持続的な関係をつくることができないため、「贈与交換」と組み合わせて持続的な関係をつくる必要があるという。ただし、この時の「贈与交換」は一般交換(レヴィ＝ストロース)である必要がある。小田(2019)は、「分配」に、一般交換(レヴィ＝ストロース)的な「贈与交換」を埋め込むことで、「ヒエラルキー」を作ることなく「コミュニズム」をつくりだすことが可能である指摘している。

以上の議論を踏まえ、本発表の後半では、ミャンマーのチャ農家とチャ摘み労働者のあいだで結ばれる「支援」と呼ばれる関係を事例に、パトロン＝クライアント関係(優劣ある二者による庇護と従属の互酬的關係)を複数の原理からなる混成態として再考し、そのなかに「分かち合い Sharing」がいかに見いだされるのかを検討した。

「支援」とは、無利子無担保で、米や食料品、現金などを授受することをいう。チャ摘み労働者は「支援」を受けた農家のチャ畑で収穫に従事することで報酬を得て、「支援」を受けたことにより生じた「負債(ラム)」を返す。チャ摘み労働者は「支援」を受けることで生存に必要な食料を手に入れ、農家は労働者を「支援」することで必要な労働力を確保する。「支援」関係では、支援する側が「養父(ポリン)」、支援を受ける側が「養子(ルリン)」と呼ばれており、彼ら自身がこの関係を擬似的親子関係に基づく、庇護と従属の関係だとみなしていることがうかがえる。しかし、両者の力関係は常に揺れ動いている。「支援」を与える側は、自分より社会的・経済的に劣位にある人びとからの「支援」の要請を断ることができないばかりか、負債の返済を迫ることもできず、優位者としてふ

るまうことを注意深く避ける様子が各所で見られる。

すでに拙稿（2022）で、「支援」関係にみられる「ヒエラルキー」と「交換」原理のもつれあう状況については検討したので、本発表ではこの関係に埋め込まれた「コミュニズム」の原理と、そこから見いだされる「分かち合い Sharing」について検討を試みた。グレーバー（2016: 146-147）によれば、「コミュニズム」は、小規模で成員が互いに平等とみなす社会では、共有（シェア）としてあらわれる。このような社会では、食物やそれ以外の基本的必需品はいずれも共有（シェア）する義務があり、その義務が日常的モラルの基盤となり、食物の要求も拒否することができないという。「支援」関係において、農家と労働者の間には「ヒエラルキー」の原理がみられるにも関わらず、農家が労働者からの「支援」要請を拒否できないのは、同じ村の成員として「各人はその能力に応じて [貢献し]、各人にはその必要に応じて [与えられる]」（グレーバー2016: 142）という「コミュニズム」の原理が働くからだといえる。

先述のように、小田（2019）は、「分配」に、一般交換的な「贈与交換」を埋め込むことで、「ヒエラルキー」を作らずに、「コミュニズム」をつくりだすことが可能であると指摘している。「支援」関係では、上記のように「分配」は行われるものの、これらは限定交換的な「贈与交換」に還元されているようである。この点については今後の課題とし、引き続きグレーバーの「コミュニズム」の概念を「分かち合い Sharing」という視点から検討していきたい。

[文献]

生駒美樹 2022 「格差のある二者の共生にみる力学—ミャンマーのチャ農家と労働者によるチャ摘み制度の調整を事例に」 河合香史編『生態人類学は挑む SESSION5 関わる・認める』199-234 頁、京都大学学術出版会。

小田亮 1994 『構造人類学のフィールド』世界思想社。

小田亮 2019 「「交換の四角形」とその混成態—市場社会を乗り越えるための試論」『人文学報(社会人類学分野)』515(2): 1-22。

グレーバー, デヴィッド 2016 『負債論 貨幣と暴力の 5000 年』酒井隆史監訳、高祖岩三郎・佐々木夏子訳、以文社。

【主な議論】

●グレーバーや小田の用語で語られていること、ないし彼らの概念を前提としてそうした

枠組に依拠して現象を理解することの意味はどこにあるのか。むしろ、人々が日常的に使っている言葉との関係が気になる。具体的には、「支援（トォ）」や「負債（ラム）」という現地語が人々のふだんの日常生活の中でどのように概念化されているのか、必ずしもグレーバーや小田のいう概念と一致するわけではないかもしれないし、われわれがイメージし概念化している意味内容とも同じではないのではないかと考えられる。パトロンクライアント関係についても彼らは「なかま」という言葉を使ったりすることからもそれはうかがえる。人々の言葉と概念の世界が、グレーバーや小田の理論的な言葉で塗り替えられてしまっているように感じられる。こうした指摘に対し、「支援（トォ）」は「助ける」ことを示す際に広範に使われる言葉であること、商業的なやりとりの場面でも使われるし（商業的な印象を薄める効果が期待されている）、日常的な「助ける」こと、「ちょっと手を貸す」とか、たとえば転んだ子どもを助けるといったごく小さな「助ける」行為についても使われる、その意味ではかなり広い一般的な言葉であることが示された。ただし、「負債（ラム）」とは別に「恩」という言葉があり「あのとき助けてもらった」といったことや、それが行為の蓄積となってゆくことを示す言葉として日常的に頻繁に使われる。そして「負債（ラム）」という言葉はチャ生産に関係する、チャを介した関係において特によく使われることが説明された。

●「支援（トォ）」の過程がお金（貨幣価値）に変換されて記録に残されるにもかかわらず、それが精算されることがいっさいないという「帳簿」のあり方が独特すぎるように感じられ、とくに対面的相互行為の場でのやりとりや交渉がどのように進むのかが気になるが、たとえば帳簿の記載で「ズル」をすることはない。帳簿は相互の信頼関係の元に書かれているのであり、誰に対しても「見せる」ことができるものでもある。逆に「ズル」などの不正をしていないことの証明にもなるようなものである。帳簿をつけるときにも精算の計算をするときにも交渉場面はほとんどなく、両者の目の前で、ただ淡々と帳簿書きの作業が進む。唯一の例外があるとすれば、これまでチャを介した関係がなかった相手が初めて「支援」を求めてきたときに、半分だけ「支援」し、半分はその場で支払ってもらおうなどの対応をすることはごく稀にある。

●労働者の暮らしの中に占める「支援」の割合は、少し前まではほぼ100%だった。その意味で「分配」と位置づけることができるものであった。現在は労働者が出稼ぎに出るようになり、現金を手にするようになった。これに伴って起きた変化は、労働者は「支援」してもらえないようなもの、たとえばテレビとかバイクなどにその現金を使うといったことであり、米や油や塩といった食糧、石鹸などの日用品や文房具、少額の現金などは相変わらず「支援」によって得ている。このことから、労働者は農家に対して節操のある「支援」を求めており、「支援」されないことはありえない、つまり「支援」を断られないも

のを要求するといった暗黙のルール（言語化はされていないが）があると言ってよい。村にいわゆる「店」はないのだが、それは店がないから人々が「支援」に頼っているというより、そもそも「支援」のシステムがあったから店は必要なかったと考えられる。村の生活では現金はほとんど使われない状況にあり、普段やりとりをしている者同士のあいだでは「お金」はほとんど動かない。

●グレーバーの話を適用しているが、彼の批判の第一は「交換のはじまりが物々交換であったはずがない」ということで、それは「クレジット（信用）」だったに決まっているじゃないかということだったと思うが、まさに現象としてはここでは「クレジット」によるやりとりが展開されていると言ってよい（信用によって物や金を渡し、あとで労働してもらう）。ある意味で「負債」はそのまま「クレジット」であると言える。精算しないところも重要で、精算しないことがクレジットになって関係が続いてゆく。「負債」を返しきってしまうことは社会的な関係の解消を意味するのであり、精算されないことで、ある種のパトロン-クライアント関係（農家と労働者の関係）も続いてゆく。つまり、「支援」はクレジットで成り立っているのであり、それを可視化するのが帳簿であると言えるだろう。贈与は「始まり（出発点）」をわからなくさせてしまうということが重要だとも言われ、何となく把握されているものだともいうが、始まりよりも今続いているということが重要であり、実質的な意味がある。「負債」があることは「負目」という感情をもたらすことが重要なのではなく（「恩人」のような言い方はあって感謝の念は表現されるが、発話において「負目」の感情に言及されることはまずない）、そのまま次の労働のクレジットになるというイメージなのではないか。

そのイメージはそのとおりののだが、常に労働者の側が負債を抱えているわけではなく、農家の側が負債をかかえてしまう場合もある。そうした両者の負債をめぐるバランス感覚も注目に値する。だが、負債額は個々の労働者世帯によって大きな差があり、大きな負債を抱えてしまっている世帯もある。だが、だからといって「もらいすぎ」を控えることを意識的にするようすもない。労働者の家計状況を農家はよくわかっていて（幼い子どもが多くてやりくりがたいへんであるなど）、支援を断ることはない。このあたりの行為はパトロン-クライアント関係との類似性として、コミュニティの成員の「生存」を保障するものとしてのパトロンという考え方が指摘できる。だが、農家の側も労働者がいないとチャの収穫が成立しないのだから、むしろ両者は共依存の関係にあり、理念としては対等であり、その意味で「共生」「共存」の原理で説明が可能とは言えないだろうか。

おそらく「支援」のシステムや、「支援」をめぐる具体的なやりとりだけでなく、生活の全般をとらえて、その中に「支援」を位置づけて分析するといった視点が必要なのではな

いか。また、分析の対象を今回はアウンさんという農家と労働者5世帯に限定していたが、それを人々が関与している関係の全体、すなわち社会全体に広げることによって、限定交換や互酬性に見えているものが一般交換的になっている可能性を議論することも可能になるのではないか。

●資本主義的な社会から見ると、行為の接続を含めて彼らのやりとりはあまりにも「清く正しく」みえてしまい、何かトラブルはないのか等、疑ってしまうが、注意深く調査した上で言えることは、ほとんど問題は生じないという不思議であり、自分がちゃんと調査できているのが不安になってしまうほどめごとはなく、みんな「いい人」だといわざるを得ない。現在、中国系の人々が入ってきていて彼らは利子を取る。こうしたやり方は好ましくないと考えられているが、それもあまり強く批判することはない。ただ、「あの人は利子を取る」というのが最大限の悪口であり、非難の言葉である。だがせいぜいその程度であり、やはりめごとや争いごとを嫌う傾向の強い人々であるということ是可以する。

こうしたやりとりの成立には北村（第2回研究会での発表参照）の議論に通じる可能性もあるように思われる。トゥルカナにおけるモノやサービスの授受の際のベツギングは断らない/断れないのが基本であり、「支援」もまず断ることはない。その際、トゥルカナの例では第3者（≡地域社会）の視線が重要であり、それをしないと非難の対象ともなり得るという意味で規範に関わる。「支援」をめぐるやりとりにおいても「支援」をすることによって世間的に評価されたりほめられたりすることはないし、規範化されているとも言えないが、しなかった場合の非難は相当なものがある。義務ではないが、そうしないことはありえないという位置づけかもしれない。その意味では規範化としての議論も可能だろう。

3-2 メンバーシップの分かちあい：ニホンザルにおける集団への移入過程の事例検討 (川添達朗)

【要旨】

本研究では、「分かちあい」は食物などの物質の贈与や分配といった「もの」や明示的な相互「行為」に限定されず、例えば「情報」や採食場所を同じくするといった行為もそこに含まれるものとして議論されてきた。霊長類の多くは群居的な集団を形成し、父系、母系、双系のいずれかの形を持ち、分散する性の個体は生涯において群れやオスグループといった集団への移出と移入を繰り返す。これは、共通のメンバーシップを持たなかった個体同士が、時間的また空間的に共存するようになる過程である。既存の個体間にみられるアソシエーションを移入個体が受け入れながら、同時に、移入個体の存在をほかの

個体にも認められる移入という現象は、時間的かつ社会的空間を他者と共有するという点において、分ちあいと位置付けることが可能であるかもしれない。本発表では、群れを移籍するニホンザルのオスを対象として、群れに移入した／しなかった事例の量的・質的分析を通して、分ちあわれるもの／分ちあわれないものを検討していく。

ニホンザルは複雄複雌の群れを形成し、オスが性成熟を迎えるころに群れを移出する母系の社会をもつ。群れを移出したオスはほかの群れに加入したりオスグループを形成したりするが、群れに加入した後もおよそ3年の滞在期間を経て再び移出をする。このようにオスはその生活史の中で所属する集団が絶えず変化し、そのたびにこれまでとは異なる他者と空間的社会的かかわりを持つ。本研究では宮城県金華山島に生息するニホンザルを対象とした行動観察を行い、群れに所属している群れオスと、群れにいない群れ外オスの空間的な凝集性とメンバーシップ、親和的敵対的相互行為の様相、優劣関係について報告する。

群れオスと群れ外オスの凝集性とメンバーシップは明らかに異なっており、メスと高い凝集性を示すか否か、そして、メスと連日一緒にいるというメンバーシップの安定性があるかどうかという点が大きく影響していた。群れオスがメスと空間的にも社会的にもかかわりを共有しているのに対し、群れ外オスは一時的に空間的なまとまりを共有することがあっても社会的なまとまりに加わることはほとんどなかった。群れ外オスとメスとの親和的相互行為は全く観察されず、オスがメスを避けるあるいはメスがオスに敵対的にふるまうことによって空間的また社会的な分離が生じ、群れのメンバーとの共存が許されないという再帰的な構造がみられた。

一方で、オス同士の相互行為は群れオスと群れ外オスの区別なく様々な個体間でひろく観察されるだけでなく、群れへ移入する契機となっていることが、「アシモ」と「イカロス」という2頭のオスの観察から示唆された。2頭とも上述した群れ外オスとメスの特徴を表すように、メスとの空間的なまとまりや親和的な相互行為は全く観察されなかった。それに加え、「アシモ」はほかのオスとも親和的な相互行為が観察されず、敵対的な相互行為もほとんど観察されなかったが、「イカロス」はほかのオスや群れの出自前のコドモと親和的な交渉が観察されていた。この2頭は年齢が同じで、出自群も同じであることがわかっている。同じような経歴を持つ2頭であるが、「アシモ」は空間的には一緒にいるにもかかわらず社会的なまとまりに入れな一方、「イカロス」は空間的にも社会的にも既存のまとまりの中に入ることができたオスであるといえるだろう。すなわち、その場に一緒にいる「共存」状態にあった「アシモ」に対し、「共存」を達成した「イカロス」と対比することができる。どのような要因がこの違いを生じさせているのかについて、その時に

存在していた個体数や性比、発情メスの数やオスの性格など様々な可能性を上げることはできるが、本報告ではそれらを十分に検討することはできなかった。しかし、少なくともオスたちの相互行為に着目することで、オスが群れに移入するプロセスと行為の関連についてその現象に迫ることはできたと考えている。

最後にオス同士の優劣関係の在り方とその発露がオス同士の凝集性に与える影響について言及する。ニホンザルの群れの個体間には直線的な優劣関係があることが知られているが、本報告では、すでに群れに加入する前の段階でオス同士の間には直線的な優劣関係があることを指摘した。オス同士の親和的相互行為は、群れオスと群れ外オスの区別なくひろく行われていることに言及したが、オス間の優劣関係は敵対的な相互行為において一方を助けるといふ連合形成にかかわっており、優位である群れオス同士が連合を作りやすいのに対し、劣位である群れ外オス同士はそのような傾向が見られない。この点には、広く親和的なネットワークを築いているオス同士であっても、群れオスの間には「われわれ」意識のようなものがあり、群れ外オスとの間に社会的なかわり方の違いがあるようである。また、オス同士の優劣関係はオスグループの微視的な離合集散の様態にも影響を与えることが指摘できる。複数の群れ外オスが集まる場において、威嚇や攻撃といった優劣関係を顕在化させる行為が行われると、劣位なオスがその場を離れることによってその場の集合が散開してしまう事例を報告した。オスグループの成立をめぐることは、社会関係ではなく二者の出会いであるのかあるいは三者の出会いであるのかといった場の構造が重要であるという指摘もあるが、本報告からは、そのような場の構造に加え、社会関係を発露させるような相互行為の有無も、オスの離合集散といった場を共有するかないかといったことにかかわる重要な要素であることが示唆される。

集団を移籍する個体は、その生涯の中で絶えず様々な相手と新しく関係を築き、それらを維持しながら時には関係を断つことを繰り返している。どのような過程を経て集団の一員となっていくのかという問いは、群居を自明な状態としてとらえるのではなくそのプロセスを問うことであり、共にいるというメンバーシップをどのように共有するのかという大きな課題に迫るものである。本報告では、オス同士の相互行為に着目することで、オスとメスがメンバーシップを形成する中で共有しているもの／していないものや、離合集散というオス同士の群居の在り方すなわち場の共有をもたらしているプロセスの一端を明らかにすることができた。このような相互行為と相互行為が行われている場へ注目することが、根源的な分ちあいである群居という状態の理解に貢献するだろう。

【主な議論】

●「空間的に共有」とはいうものの、実際には群れオスと群れ外オスが時間差で同じ場所を共有しているということもあるはずで、その意味では空間に時間が加わった「時空間的に共有」といった方が正確だろう。群れ外オスは、みえない、つまり視覚的には知覚できないが、「群れがいる」ことが音で知覚できるような場所にいることはある。だからといって群れに近づいていくとか、何か明示的な行為や交渉をするということはないのだが、長時間にわたってその場所に居続けたり、そのような距離を保って群れとともに移動するということがある。ただ、それが何を意味するのかはよくわからない。

●同じ島でも幸島と金華山では個体の密度が異なり、島が狭く個体密度の高い幸島では出会いの頻度が金華山よりも高いという背景はある。またもっと単純に群れ外オスの数という問題もある。こうした話の際、「島」という空間的な制限があること、つまり、移動してゆける距離に限りがあることが何か意味をもつのではないかという可能性が気になる。

「時空間の共有」という事態も島の広さや個体の密度や群れの数などの要因が「出会いの頻度」に影響をあたえることはあるだろう。また、「群れの周辺」という空間的意味/概念も、「群れ外オス」という社会的意味/概念もそうした要因によって異なってくると考えられる。たとえば屋久島では群れの密度が高すぎて、群れ外オスとして存在するだけの物理空間的余裕がないともいえる。屋久島では群間の（敵対的な）インターアクションが頻繁に起きるが、その時にどちらの群れの個体なのかが不分明なオス個体がいる。金華山では群れ外オスとして観察される個体が屋久島では群れの周辺オスとして観察されるといったことが起きているのかもしれない。群れ外オスも群れの周辺オスも現象としては似ていて、群れの内なのか外なのか（金華山）、群れの中心なのか周辺なのか（屋久島）と観察者は問うかもしれないが、金華山と屋久島では観察される個体の位置取りについての現象自体は似たようなイメージ（あるいは同義的）だといってよい。その意味で、「群れ」という概念が果たして必要なかどうか、議論の余地がある。

●本発表の中心にあるのは「群れ」を今いちど問い直すという命題だろう。言い換えれば、群れをアприオリに設定（想定）するのではなく、相互行為（インターアクション）から見直してみようという提言だろう。そのとき、オスにとっての群れとメスにとっての群れは違うだろう。オスに着目した場合、群れ内オスと群れ外オスそれぞれにとって、メス（群れ内のメス個体）はどのような存在なのかが問われるべきで、メスと社会的相互行為ができることをもって、われわれ（観察者）は群れ内オスと認識するのだが、それはメスから認められる（審級?）、「受け入れられる」ことにより「群れオス」というカテゴリーが生まれるのかもしれない。群れ外オスから群れ内オスへの移行は社会的行為を共有することができる相手が、①オトナオス同士、②コドモ（3歳くらい。母親から自立

しつつある年齢以上のコドモ)、③オトナメスといった、関係をもつことができるようになる段階(プロセス)があり、それで群れの「内(中)」に居られるようになってゆく。ただし、メスも一概に「メス」とは言えないし、オスの関係の持ち方にも個体差がある。交尾期のメスとの関わりをもつことが決定的になるわけではなく、群れのさまざまな個体との相互行為を繰り返すことにより群れに残る=時空間の共有を増やしてゆき、それが群れへの移入につながる。

●ヒトリオスは老齢オス(だいたい15歳以上)であることが多く、老齢個体は周りに他個体がないという印象がある。若いサル(出自群を出てすぐ、ないし数年のオス)は比較的他個体といっしょにすることが多いようにみえる。また、生活史において、生涯、群れへの移籍を複数回繰り返すという事例は金華山では稀れであり、2回以上群れオスになったオスは稀れである。つまり、出自群を出たのち、一度別の群れに移入して、さらにその群れを出た後で再度別の群れに移入することは稀である。老齢個体がひとりを好む感じはある。何かを「分かちあう」ことが難しくなると言えるかもしれない。近寄られたり、触られたりするのを嫌がる傾向があり(攻撃的になる)、社会性が低下する、「分かちあわない」感じは、複数の観察者間で共有できる。

●ニホンザルに「分かちあい」というイメージはあまりなく、むしろ「取りあい」の関係にあることの方がふつうではないか。「分かちあい」が可能か否かは食物の量によってかわるだろう。たとえば、食べ物が十分にあれば「分かちあい」ができるだろうけれど(みんな丸テーブルを囲んで食べる中華料理のイメージ)、ニホンザルの場合は食べ物は「取りあい」ものであるようにみえる。そもそもニホンザルの序列の理論は「取りあい」で説明されてきた。古典的な理論においても、ニホンザルはたとえば「場所」を取りあうものであり、時空間の共有が可能なのは序列があるからにほかならず、それによって複数個体が同所的にいられる。ニホンザルのイメージは「分かちあい」よりは「取りあい」にあるが、それがじわじわと「共有」や「共生」のイメージで語られるようになりつつあるのかもしれない。

●交尾機会という要素を入れてみたときにどうなるのか。群れオスと仲のよい群れ外オスはメスの近くにいられる可能性が高くなる(メスの近くにいても怒られにくい)。メスの反応(受け入れる/許容するか否か)も問題になるが、交尾機会が増すことも事実だろう。群れの発情メスが極端に少ない年に、群れの第一位オスが他の群れに「出張」した事例もある(ただし、元の群れに戻ってきたときには順位を下げた)。

●「群れ」があるのかないのかという問題は本源的な問題としてあるし、群れオスと群れ外オスの線引きの難しさは常につきまとう。どのようなオスが「群れオスっぽい」のかと

考えてみるのもひとつの方法かもしれない。もちろんグレイゾーンはあるのだろうが、どのような機能があると群れオスっぽいのかなど機能的にみるのも手かもしれないし、構造的にみることとの両方からアプローチする必要があるのかもしれない。そうは言っても、「群れオスっぽいというはあるよね」という共通認識はニホンザル研究者のあいだに共有されている。